

第12回国際第四紀研究連合会議の報告

表記の国際会議が今夏、7月31日から8月9日までの10日間、カナダのオタワで開催された。会場はダウンタウンの中心地ともいえるリドセンターやバイワードマーケットに近接するコンGRESSセンターである。会議に先だって7コースの野外巡検が、また会議後に8コースの野外巡検が行われた。会期中日の8月5日には13コースの1日野外巡検が催された。

会期中、A～Gの7シンポジウム、1～34の特別セッション、1～15の一般セッション、1～4のポスターセッションが催された。シンポジウム、セッションとも、前回のモスクワ大会のような研究領域でまとめるのではなく、最近の第四紀学の興味あるテーマに沿って系統的にまとめられた。したがって、古植物や植生変遷などといったセッションは設けられていない。あらゆるシンポジウムやセッションの中に植生史に関わる話題が登場するのである。ただ、昆虫遺体群集や哺乳類化石のような研究者が比較的少ない領域は、1つのセッションにうまくまとめられた。1会場で系統だった議論が進められるという点ではすごく便利であったように思う。

今回の会議では、考古学や人類学の方面のシンポジウム、セッションが目だった。テーマに掲げられた主なものは次の通りである：Reconstruction of the Environmental Setting for Archeological Sites / Archeology : Africa and Asia / Paleoenvironments of Ancient European Hominids / Peopling of the New World.

最初の考古学における古環境復元に関するセッションでとくに注目を集めたのに骨の安定同位体分析にもとづく古気候・古ダイエツト研究とプラント・オパールを用いた地域的・局地的環境復元の研究があった。カナダのシュワルツによる骨の安定同位体研究は、シカ骨の酸素同位体比と骨コラーゲン中の水素のD/H比から当時の降水量・湿度を求める方法、それに炭素と窒素の安定同位体比から動物や人間の古代食料を解明する方法に関するものであった。アメリカのロフナーによるプラント・オパールの研究は、古植生・景観を面的に復元しようとの意欲的なものであったが、日本の研究者が口にする細胞形態との対応がほとんどつかず、一体プラント・オパールの形態学はどうなっているのかと不思議に思った。

植生史関係ではポーリングコアの花分析によるものが圧倒し、植生図や気候変動を論じたものが大半であった。第四紀における進化・系統学的な研究がないのが遺憾であったが、グローバルな気候変動や環境論が台頭する雰囲気の中では仕方がないのかも知れないと思った。ただ、第四紀学においては歴史が浅い昆虫遺体に関するセッションでは、形態・分類や生態の綿密な検討を基礎にした過去の分布論・環境論が論じられ、種の分布や分化研究を示唆するものが多く興味をひいた。

なお、次回は4年後、お隣の中国で開催されることが決定した。

(辻 誠一郎)